



TITLE:

# 日米貿易の調整

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

---

CITATION:

谷口, 吉彦. 日米貿易の調整. 経済論叢 1935, 40(6): 994-1017

ISSUE DATE:

1935-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130597>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 六 第      卷 十 四 第

行發日一月六年十和昭

## 論 叢

藝術家と課税 ..... 法學博士 神戸正雄

民族と社會の發達 ..... 文學博士 高田保馬

農産物の生産調整に就いて ..... 經濟學博士 八木芳之助

## 時 論

日米貿易の調整 ..... 經濟學博士 谷口吉彦

## 研 究

經營分析と經營統計 ..... 經濟學士 蛭川虎三

フランスに於ける平價切下論に就いて ..... 經濟學士 松岡孝兒

百貨店出張販賣存續の條件 ..... 經濟學士 堀 新一

## 說 苑

統計圖表について ..... 經濟學士 高岡周夫

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第四十卷總目錄

時 論

日米貿易の調整

谷 口 吉 彦

目次	一、輸入超過の問題	二、對米貿易の入超傾向	三、對米貿易の内容
	四、絹棉交換の問題	五、對米輸出の促進	

一、輸入超過の問題

日本商品の世界的進出といふ表面の事實におし隠されて、その裏面に潜在する輸入超過の事實は、わが國民にさへ多くは看過され勝ちである。況んや邦品進出の聲に脅かされてゐる諸外國の中には、わが國が輸出ばかりを増進せしめつゝあるかと誤解せるものも少くない。然るに事實は反對に、輸出の増進に劣らず輸入の増進をつゞけ、その結果として連年にわたつて輸入超過をつゞけつゝある。この事實は諸外國をして十分に認識せしむると共に、わが國民もまた之を全く看過すべきでない。いま最近十年間の入超傾向を第一表に示す。

第一表 最近十年間の輸出入

	大正十四年	大正十五年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年
輸出總額	三三〇五 百方圓	三二四四	元九三	一九七二	三三六	一四九	二四二	一四〇元	一八六一	三三二
輸入總額	三三〇五 百方圓	三三七	三七九	三六	三三六	一五四	三三五	一四三	一九七	三三二
入超額	三三七 百方圓	三三	一八	三四	宅	六	六	三	五	二〇
輸入を一〇とする輸出	八九六	八六〇	九二四	八九八	九六九	九六一	九八八	九八五	九七一	九八二

第一表によつて明らかなる如く、大正十四、五年頃の巨大な入超に比較すれば、最近は多少減退はしてゐるが、併し昨年 of 如きは一億一千萬圓の入超を示してゐる。尤も貿易價額の評價上の相違から、輸入は輸出よりも高く評價されるから、この程度の入超ならば、實際には輸出入は均衡してゐるかとも考へられる。けれども之は單なる一の推測に止まるのみならず、他方に輸出進出の原因となつてゐる爲替の下落は、吾國の國際收支を甚だしく惡化せしむる危険があるから、少くとも貿易上の收支は、出来るだけ之を改善する必要のあることは言ふまでもない。

輸出躍進に拘らず、輸入超過の年々繼續する理由は、第一に自然富源に乏しき吾國の事情では、輸出を増進せしむると同時に、輸入をもまた同様に増進せしめねばならず、第二に輸出を増進せしめてゐる圓爲替の下落は、それだけ對外支拂を不利にして輸入價額を高めしめ、第三に國內における軍需景氣の勃興は、原料品・材料品の輸入を増大せしめ、第四に最近の圓爲替下落の傾向は、吾國の見越輸入を増加せしむるに至つたからである。ことにこの最後の二原因のために、今

年に入つての入超傾向はますます甚だしく、漸く貿易の前途を悲觀するものさへ生ずるに至つた。即ち第二表によつて明らかなる如く、今年第一四半期の貿易は、昨年同期に比較して輸出は二割以上の増進を示せるに對し、輸入は三割五分近くの増加を示し、従つて輸入超過は昨年同期の二倍以上に達してゐる。

第二表 最近の入超超過

	輸出 價 額			輸入 價 額			輸入超過		
	一月	二月	三月 計	一月	二月	三月 計	一月	二月	三月 計
昭和十年	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000
昭和九年	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000
昭和九年と一〇〇	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000
昭和十年の貿易	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000	1,000,000	1,000,000	3,000,000

而してこの輸入超過の内容は、主として輸出工業の原料たる棉花と、軍需工業の原料たる鐵である。即ち輸出景氣と軍需景氣の持續する限り、輸入超過の傾向は容易に脱せらるべくもないと思はれる。従つてこの入超を脱却する方法は、輸入を防遏または制限するが如き消極的方法によらず、輸出を増進して輸入を相殺または超過せしめんとする積極的方法によらねばならぬ。それがためには最近の風潮に従つて、交換貿易・互惠條約・求償協定等々の精神に基き、先づ吾國の入超先の諸國に向つて、わが輸出の増進を要求せねばならぬ。いま主要なわが入超先およびその入超額を第三表として示す。

### 第三表 主要入超先および入超額

入超先	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年
北米合衆國	(出) 六三三八 <small>千円</small>	(出) 八三〇四 <small>千円</small>	六四七六 <small>千円</small>	二六五四 <small>千円</small>	三七〇四三 <small>千円</small>
濠洲	六八七九	九四九三	九七六二	一五三二七〇	一三三三九六
獨逸	九四七九	六四八七	七三九二	八三六六	八九九〇六
滿洲國	—	—	三五六三	六五八六	五七〇五八
加奈陀	二八五六	三六〇五	三〇九四	四〇三二	四五四二七
英領印度	五二六三	三七九八	(出) 五六六	(出) 四一七	三九四九
露領アジヤ	一〇五九	一五九九	一八〇三	一九五三	二二八六
白耳義	六〇四〇	三二五	一九七	六九五四	七五一
中華民國	(出) 九二五	(出) 一〇五三	(出) 五三三	五一〇四	二五〇〇
英吉利	三〇六四	一〇一八	一八三四	(出) 五九二	(出) 九三三三

第三表について見るに、その中には例へば北米合衆國・中華民國の如く、數年前の出超國より入超國に轉ぜる國と、英吉利の如く入超國より出超國に轉ぜる國と、濠洲その他の多數國の如く常に入超國たる國とあつて、時の経過と共に次第に變化するものではあるが、今かりに昭和九年の入超額について見るに、これら諸國からの入超額合計七億六千萬圓に達し、その約半額の三億七千萬圓は北米合衆國からの入超額に屬する。然るに昨年の吾が貿易全體の入超額は一億一千万圓であるから、差引六億五千万圓は他の諸國に對する吾國の出超を示せる筈であり、これらの出超國において邦品の壓迫または求償協定の要求を惹きおこし、そのために邦品進出の勢を沮害されつゝあるわけである。然らば同じ要求は吾國からも、わが入超先の諸國に對して提出さるべき

である。從來の吾國におけるが如く、貿易調整は一に諸外國からの要求を待つて、消極的にのみ之を調整するに於ては、輸出伸力を頓挫せしむるばかりで、輸出増進の機會を與へられることはない。此の如くんば今日においてさへ惡化の懸念ある輸入超過または國際收支の前途は、甚だしく悲觀さるゝの狀態にある。そこで吾國から進んで積極的に調整する場合に、先づ第一に問題となるは、入超絶對額の最大な北米合衆國である。この片貿易を調整して、かりに昨年度の入超額三億七千萬圓の三分の一を調整したとせば、それだけで直ちに、全體としての吾が貿易は出超に轉するからである。

## 二、對米貿易の入超傾向

吾國の立場からする積極的の貿易調整は、まづ入超絶對額の最大といふ點からは、北米合衆國が第一に問題となる。けれども片貿易の調整が現實に問題となるのは、必ずしもその入超絶對額のみが唯一の原因ではない。たとひ巨額の入超先であつても、それが經濟法則の自然的結果である場合には、その調整は自國の輸入制限による外ない。然るにその入超先の相手國が、關稅その他の輸入制限を行つて、吾國の入超傾向を強めるが如き場合には、その制限の程度に比例して、調整に對する吾國の要求はますます強まらねばならぬ。この意味では、入超絶對額は比較的に少いけれども加奈陀・濠洲に對する調整の方が、北米合衆國に對するよりも、緊急の問題である。

これらの諸國は謂はゆる英帝國ブロックを形成して、わが商品の輸入に對して、極端なる差別待遇をなし、そのために吾が入超をます／＼強化せしめつゝあるからである。之に比すれば北米合衆國は、これまで特に著しき差別待遇を吾が商品に課したわけではない。たゞ自國産業保護の立場から、わが特殊商品に高率の關稅を課してゐた。然るに最近に至り、新たに吾が綿布輸出を制限せんとする運動おこり、更に一部には原料品たる生絲輸入にまで、關稅を課せんとする主張が現はれるに至つた。即ち今日では對米貿易の調整は、その入超額の最大なる點と、その邦品壓迫政策の強化とのために、二重の意味において重要性を加重するに至つた。

最近アメリカに現はれた日本綿布の排斥運動は、周知の如く經濟的には殆んど何等の根據もなきことである。即ち問題の動機となつてゐるアメリカ綿業恐慌の原因は、主として彼等に内在する缺陷と、棉花栽培を保護するための棉花加工稅とによるものであつて、わが綿布の進出の如きは、殆んど問題にもならない程の數量であることは、次の第四表によつて明らかに實證される。

第四表 對米綿布輸出量

	對米輸出綿布 (一)				米國生産綿布 (二)	(二)に對する(一)の百分比
	生地	晒	其他	計		
昭和五年(一九三〇)	—	—	—	三二	六五八〇〇〇	0.005%
昭和六年(一九三一)	—	—	—	四八	七二二〇〇〇	0.007
昭和七年(一九三二)	一六	三三	三三〇	二六六	六四四〇〇〇	0.006

日米貿易の調整

第四十卷

九九九

第六號

六三

1) 大藏省 外國貿易月表。  
2) 内外綿業年鑑。



昭和八年(一九三三)	三三三	二四〇	三二四	七九六		
昭和九年(一九三四)	二四六	三三二	三六三	二五〇		
昭和十年(一九三五)	二六	六〇九	一〇五	七三三		
〃	二月	七	四〇三	二九	天七六	
〃	三月	四三	三七一	三三八	四六一	

第四表によつて明らかなる如く、わが對米綿布の輸出數量は、アメリカ生産額の千分の一にも足らぬ。たゞ今年に入つての躍進は著しく、最初の三ヶ月にてすでに昨年一ヶ年の總量を凌駕してゐるが、併し假りにこの勢をもつて輸出せられた所で、精々七、八千萬方碼にすぎず、漸くアメリカ生産額の一%に達する程度である。従つてそれは經濟的には殆んど問題でなく、かりに日本綿布を全く禁遏しえたとしても、アメリカ綿業界は殆んど影響を受けないであらう。併しなから今日ではこの問題は、すでに一つの政治問題にまで發展してゐるから、之をたゞ經濟的にのみ觀察することは許されない。今もしアメリカ政府が工業資本の力に動かされて日本綿布を禁遏し、または棉花加工税の代償として生絲輸入税を課するが如き場合には、吾國も恐らく通商擁護法を發動して、棉花輸入に何等かの制限を加ふることとなるべく、日米貿易はこゝに甚だしく沮害されることとなるであらう。それは結局アメリカの農業利益を犠牲に供して、その工業利益を保護するものであり、棉作減産・棉花加工税・その他の農業保護政策と矛盾することとなる。併し之は尙ほ現實に當面した問題ではない。

對米入超の調整に關聯して、中・南米貿易をその間に介在せしめんとする三角貿易協定の主張が、最近に問題となりつゝある。三角貿易の方法は、バーター案の一つの代替策として、吾々の既に早く注意した所であるが、<sup>1)</sup>この場合にも之を實現しうる可能性は十分にある。即ち吾國は北米には入超、中・南米には出超であり、北米は吾國に出超、中・南米に入超であり、中・南米は吾國に入超、北米に出超の關係にあるから、之を組み合わせば三角交換貿易は不完全ながらも成立しうるであらう。この問題は對米調整の問題としても、今後に研究さるべき重要な問題ではある。たゞ吾國の立場よりする調整策としては、この三角貿易を自ら進んで提案すべき謂れはない。吾國は合衆國に對し、貿易統制上は極めて有利な立場にあるのであるから、どこまでも直接に單純に、その片貿易の調整を要求せねばならぬ。之に對する合衆國側の對策または提案としては、或は中・南米を介在せしむる三國貿易を考慮することは、ありうることはあるが、併し吾國より進んで之を提案することは、最後の對策として留保せねばならぬ。この意味において、こゝでは三角貿易による調整は姑らく別の問題として、専ら直接に合衆國との間に行はるべき調整を問題とするに止める。まづ戰前一九一〇年(明治四十三年)より昨年に至る二十五年間の對米輸出入を示せば第五表となる。

第五表によればわが對米貿易は、戰前より戰時・戰後を通じて最近まで、二三の例外を除けば、大體においてほゞ一億圓内外の吾國の出超を示して來た。然るに最近三年來は、この傾向を逆轉

1) 拙著、貿易統制論、P. 137.

第五表 對米輸出入

	輸 出	輸 入	差 額	輸入を100 とする輸出 %
	千円	千円	千円	
1910	143 702	54 699	+ 89 003	262.7
1911	142 726	81 251	+ 61 475	175.7
1912	168 708	127 015	+ 41 693	132.8
1913	184 473	122 408	+ 62 065	150.7
1914	196 539	96 771	+ 99 768	203.1
1915	204 141	102 534	+ 101 607	199.1
1916	340 244	204 078	+ 136 166	166.7
1917	478 536	359 707	+ 118 829	133.0
1918	530 129	626 025	- 95 896	84.7
1919	828 097	766 381	+ 61 716	108.1
1920	565 017	873 182	- 308 165	64.7
1921	496 278	574 400	- 78 122	86.4
1922	732 376	596 169	+ 136 207	122.8
1923	605 619	511 977	+ 93 642	118.3
1924	744 923	671 005	+ 73 918	111.0
1925	1006 252	664 992	+ 341 260	151.3
1926	860 880	680 185	+ 180 695	126.6
1927	833 804	673 685	+ 160 119	123.8
1928	826 141	625 536	+ 200 605	132.1
1929	914 084	654 058	+ 260 026	139.8
1930	506 220	442 882	+ 63 338	114.3
1931	425 330	342 289	+ 83 041	124.3
1932	445 147	509 873	- 64 726	87.3
1933	492 237	620 778	- 28 541	79.3
1934	398 928	769 359	- 370 431	51.9

せしめて吾國の入超となり、昨年の如きは三億七千萬圓といふ未曾有の巨額に達してゐる。そこで問題は先づ第一に、斯くの如き最近の入超傾向は、果して一時的・例外的に現はれたものか、または今後も永續的に現はれるであらうかにある。そのためには、斯かる出超から入超への轉換が、何故に惹きおこされたかの原因を探らねばならぬ。最近の十年間について見るに、輸入はほど六億圓内外を上下して、その間に著しき變動はない。之に反して輸出は、八億圓以上から四億

1) 昭和六年まで人絹織物を含む。

圓程度まで著しき激減を示してゐる。而してこの間に、出超から入超に轉じたのであるから、この轉換は輸入増加に負ふよりも、寧ろ主として輸出減退に由來するものである。換言せば輸出の減退に拘らず、輸入は殆んど減退せず、昨年 of 如きは却つて著しく増大せるが爲めである。そこで問題は最近十年間における對米輸出の減退は何故か、また輸出の減退に拘らず輸入の減退せざるは何故かといふことに歸する。これを明らかにするためには、對米貿易の内容に立ち入つて検討せねばならぬ。

### 三、對米貿易の内容

まづ第一に對米輸出は、最近の十年間に十億圓から三億九千萬圓に激減して、そのために吾國は從來の出超から轉じて、巨大の入超を見ることゝなつたが、然らばこの著しき輸出減退は、何のために惹きおこされたものか、いま主要な對米輸出品について、最近十年間の變化を第六表に示す。

第六表について見るに、例へば玩具・罐頭詰食料品の如くこの間に漸増を示せる商品もあるが、併し他の大多數の商品は減退してゐる。ことにその絶對額において輸出の主要部分を占むる生絲の減退は最も著しく、十年前の八億五千萬圓から昨年の二億四千萬圓まで三分の一以下に落ち込んでゐる。今もし生絲輸出が少くとも當時の半額に止まりうるならば、今日の對米輸出は二億圓

第六表 對 米 輸 出 品

年 次	生 糸	絹織物	陶磁器	茶	罐頭食品
大正14	849 486	21 037	12 022	12 242	7 854
15	709 379	26 263	13 947	10 088	8 550
昭和 2	637 593	16 483	11 430	7 826	8 172
3	616 927	14 201	12 887	8 398	10 524
4	702 304	13 809	13 728	7 476	10 852
5	398 715	6 527	10 820	6 366	9 265
6	342 479	4 626	6 634	5 274	7 810
7	360 148	4 243	6 441	4 752	8 053
8	355 805	5 562	10 180	5 083	17 838
9	239 568	5 258	14 313	4 629	11 182

年 次	屑糸眞綿 主糸等	薄荷腦	ブラッ シュ	帽 子	翫 具
大正14	11 615	6 967	3 096	2 090	3 335
15	7 439	6 134	4 595	4 311	3 822
昭和 2	5 778	2 091	2 982	2 418	2 856
3	3 093	1 680	2 718	1 378	3 317
4	4 102	2 039	3 810	6 585	4 224
5	2 560	2 018	1 328	3 688	3 469
6	1 583	1 669	1 122	6 136	2 921
7	141	2 014	1 256	3 033	4 986
8	73	2 691	1 679	4 143	6 975
9	78	2 575	1 807	4 521	9 603

以上を増す筈である。それ故に前述の對米入超を惹きおこした輸出の減退は、主として生絲輸出の減退に負ふ事がわかる。その他に絹織物・茶・屑絲類・薄荷腦等も減退してはるが、その絶對額においては生絲に比し殆んど問題に

ならない。

然らば生絲輸出の減退は何故か、それは果して一時的か永續的か、之を明らかにするためには、先づ生絲價額の減退が、數量減少によるか、または價格下落によるかを検討せねばならぬ。

第七表

生絲の對米輸出數量および輸出價額<sup>1)</sup>

大正十四年 大正十五年 昭和二年 昭和三年 昭和四年 昭和五年 昭和六年 昭和七年 昭和八年 昭和九年

生絲輸出數量	百斤	
	指數	金額
100.0	101.1	115.8
110.1	110.1	131.4
108.1	108.1	108.1
113.9	113.9	131.3
101.4	101.4	101.4

生絲輸出價額	千圓	
	指數	金額
100.0	83.5	75.1
75.1	75.1	75.1
82.7	82.7	82.7
104.9	104.9	104.9
40.3	40.3	40.3
44.4	44.4	44.4
26.2	26.2	26.2

生絲現物相場 <sup>2)</sup>	價格	
	指數	價格
100.0	188.5	150.3
150.3	150.3	150.3
72.2	72.2	72.2
70.7	70.7	70.7
104.6	104.6	104.6
33.1	33.1	33.1
40.3	40.3	40.3
36.9	36.9	36.9
35.5	35.5	35.5

第七表によりて明らかなる如く、生絲輸出の數量は、この十年間に殆んど減退してゐない。それにも拘らず輸出價額の著しく減退してゐるのは、生絲相場の暴落によるためであつて、この間の下落率は輸出價額の減退率とほぼ同じく、およそ三分の一に落ちてゐることが判る。そこで問題は生絲相場の下落に歸着する。そのために生絲の輸出價額が減退し、そのために對米輸出の總額が減退し、そのために對米入超の傾向が強められたものである。

然らば生絲相場の下落は何故か、第一は世界恐慌の影響によるアメリカ購買力の減退であらう。前表の生絲相場を見るも、一九三〇年以來の急激な下落が特に顯著である。この限りではアメリカ

1) 大藏省 外國貿易月表に據る。  
2) 横濱市場標準格 百斤建現物平均價格 昭和九年は前半期。(蠶絲年鑑)

カ景氣の回復と共に、生絲購買力も或る程度に回復さるべく、生絲相場も或は多少の回復を示すであらう。然しながらアメリカ景氣の回復が、急速に來るであらうとは考へられず、たとひ幾年かの後に或る程度の回復を見たとしても、生絲相場が再び以前の地位に回復するであらうとは考へられない。それは生絲下落の第二の有力な原因として、周知の如く人絹生産の勃興を考へねばならぬからである。最初の間は人絹は生絲の敵ではないと考へられたが、最近では人絹の技術的進歩と殊にその生産費の低下による價格の下落は、世界恐慌による購買力の低下と結びついて、著しく生絲を壓迫するに至つた。結局するところ生絲輸出價額の減退は、多少の回復はあるとしても著しく今日の頽勢を挽回することは困難であらう。従つて對米輸出の減退傾向は、これらの貿易品に關する限りは、之を自然に放任しては、著しく増大せしむることは困難であらう。

第二に對米輸入品は、この十年間に殆んど著しき變化なく、最近では却つて増大の傾向さへある。これは前述の輸出減退と對照して、最も注意すべき事實であるが、然らばその内容は如何なる商品より成るか、いま主要なる對米輸入品を第八表として示す。

第八表に見らるゝ如く、對米輸入品は原料品その他の生産財を主とし、さきの對米檢出品が多くの消費財を含むのと對照されるが、この點は姑らく別問題とし、最近十年間における増減を見るに、例へば木材・小麥の如く減退せるものもあるが、多數の商品は寧ろ漸増傾向をとり、棉花・鐵類・機械類・自動車及部分品等の増加が著しい。ことに絶對額の大なる點において棉花輸入價額

第八表 對 米 輸 入 品

年 次	棉 花	鐵 類	機械類	木 材	自 動 車 及 部 分 品
大正14	360 166	30 048	37 761	60 484	9 226
15	317 427	30 534	42 073	84 708	13 104
昭和 2	343 563	36 744	31 112	71 289	16 023
3	245 926	39 237	34 320	84 926	29 353
4	276 357	39 929	41 874	67 315	31 046
5	176 800	29 067	25 925	32 619	19 867
6	153 700	8 545	16 251	26 176	15 816
7	320 751	12 681	17 768	20 225	13 838
8	381 655	27 692	22 246	23 744	13 288
9	400 918	67 913	35 535	20 966	31 553

年 次	小 麥	礦 油	銅	製紙用 パルプ	皮革類
大正14	25 580	15 435	214	2 513	3 788
15	25 293	16 746	1 106	792	4 199
昭和 2	18 365	16 963	5 779	593	7 215
3	15 915	15 413	8 785	1 289	6 575
4	15 044	15 119	2 456	2 317	6 820
5	17 961	21 461	296	832	4 087
6	2 523	19 695	69	2 418	3 687
7	751	18 708	123	3 951	4 378
8	238	14 572	7 238	7 801	5 087
9	9 869	10 106	26 137	16 321	7 030

の激増は、さきの生絲輸出價額の激減と對照して、最も注意すべき事實である。そこでこの棉花輸入價額の増加は、果して輸入數量の増加か、または棉花相場の高騰によるかの問題を生ずる。

第九表

棉花の對米輸入數量および輸入價額<sup>1)</sup>

1) 大藏省 外國貿易月表に據る。



大正十四年 大正十五年 昭和二年 昭和三年 昭和四年 昭和五年 昭和六年 昭和七年 昭和八年 昭和九年

棉花輸入數量  
 十萬斤  
 三・七九  
 四・三三  
 六・五九  
 六・七一  
 四・八五  
 三・八三  
 五・二二  
 九・〇一  
 七・四四  
 六・四六

棉花輸入價額  
 金額  
 三・〇一六  
 三・七四七  
 三・四五六  
 二・四九六  
 二・七六五  
 二・六〇〇  
 一・五九〇  
 三・〇五一  
 一・八五五  
 四・〇九八

棉花現物相場  
 價格<sup>2)</sup>  
 五・三三  
 四・六九  
 五・一九  
 五・七三  
 六・二二  
 四・三九  
 三・七八  
 五・九六  
 五・〇七  
 五・三三  
 四・六六

之によれば棉花輸入數量はこの十年間におよそ二倍近くに増進してゐる。それにも拘らず輸入價額は僅かに一割程度を増加せるに過ぎない。これは棉花相場の下落に負ふ所である。逆に言へば棉花の下落に拘らず、輸入價額の却つて増大せるは、輸入數量の著増を見たからである。之を前の生絲輸出の減退と對比すれば、生絲相場の下落の程度は、棉花に比して遙かに大なる上に、之に逆比する數量増加を見なかつたために、かくの如き價額の著減を來たしたものである。

#### 四、絹棉交換の問題

絹棉交換の問題は、日米各自の農業對策の見地から、重要な意義を有することは、さきに私の提唱した所であつた。即ち我國の蠶業對策の見地から、一定數量の生絲の輸出をアメリカに確保せしむると共に、アメリカの棉花對策の見地から、吾國が一定數量の米棉輸入を保證せんとす

2) 昭和三年以降ストリクト、ミッドリング、それ以前はブローチ、故にこの指數は嚴密に正確ではない。『綿絲紡績事情參考書』に據る。

るものである。然るに生絲と米棉との交換貿易は、またこゝに問題とする日米貿易調整の見地から見ても、重要な意義を有すべきことは、以上に論述し來れる所によつても、ほど明らかであらう。以下この見地から同じ問題を再論しようと思ふ。

先づ第一に生絲と米棉とは、各々の輸出貿易において最も主要な地位を占める輸出品であるのみならず、日米間の貿易においても、最も主要な地位を占めてゐる。いま生絲輸出が吾國の輸出總額において占める地位ならびにそれが對米輸出總額において占める地位を算出し、之を米棉の同じ地位と對照せしめて第十表を示す。

第十表 生絲および米棉の貿易上の地位

生絲の貿易上の地位		昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年
		%	%	%	%	%
(一) 日本輸出總額における生絲の地位		三六・四	二九・三	三二・〇	二七・一	二二・〇
(二) 對米輸出總額における生絲の地位		七六・八	六八・八	八〇・六	八〇・九	七三・三
(三) 米國消費生絲における日本生絲の地位		八七・二	八二・七	八五・〇	九三・七	九〇・九
(四) 生絲輸出總額における對米輸出の地位		九六・七	九五・五	九六・五	九四・〇	九〇・八
(一) 米國輸出總額における米棉の地位		一七・九	一三・一	一三・七	二二・九	二四・二
(二) 對米輸入總額における米棉の地位		四二・三	四〇・〇	四四・七	六三・九	六二・五
(三) 日本消費棉花に於ける米棉の地位		四三・三	四〇・四	四六・九	七〇・三	六二・三
(四) 米棉輸出總量における對日輸出の地位		二五・二	一八・二	二六・三	二〇・七	二四・五

第一に、輸出總額における生絲または米棉の地位を見るに、生絲はわが輸出の二割乃至三割を占めてゐるに對し、米棉もまた多少低度ではあるが、アメリカ輸出の二割内外を占めて、何れも

その國にとつては最も重要な輸出品を構成してゐる。たゞ最近における傾向を見る時は、兩國の間に著しき相違が認められる。即ち生絲の地位は減退傾向をとつて、三割以上から二割内外に低下してゐるに反し、米棉の地位はこの間に却つて向上しつゝある。かくの如く生絲の相對的地位が低下しつゝあるのは、最近のわが輸出躍進によつて、生絲以外の他の輸出品の進出著しきがためであつて、わが貿易全體の立場からは寧ろ喜ぶべき現象である。この傾向の相違から言ふならば、吾國にとつての生絲輸出市場の重要さは減退しつゝあるに反し、アメリカにとつての棉花輸出市場の重要さは、却つて増大しつゝあると觀察せねばならぬ。

第二に、對米輸出における生絲の地位は、全體の七、八割を占めて甚だしく集中的である。之に對して對米輸入における米棉の地位は、全體の五、六割を占めて、これまた稍々低度ではあるが、著しく集中的である。従つて日米貿易の調整を考ふるに當つては、何よりも先づこの二つの商品が中心となる。生絲の輸出と米棉の輸入をそのまゝに放置して、日米貿易を調整することは困難である。而して最近の傾向は、前項と同じ理由によつて生絲の地位は低下するが、米棉の地位は低下しない。この傾向より見る時は、生絲以外に吾が對米輸出を増加しうる方法が考へられるわけである。

第三に、米國において消費せらるゝ生絲のうち吾國生絲の占むる地位は、壓例的に優勢であつて、全體の九〇%以上を占め、且つ次第に増加の傾向にある。従つて他國の生絲の競争は大なる

問題ではなく、競争は寧ろ人絹側より來ること前述の如くである。之に對してわが國內に消費せらるゝ棉花のうち、米棉の占むる地位は、四〇%乃至六〇%に過ぎず、そこには印棉・エジプト棉・ブラジル棉・アフリカ棉・支那棉の如き競争相手があり、品質と價格の關係如何によつては、米棉の地位は大いに變化しうるものである。

第四に、吾國の生絲輸出總額中における對米輸出の地位は前表の如く九〇%餘を占め極端に集中的である。即ちアメリカは生絲輸入國として殆んど獨占的である。こゝに生絲貿易ひいてはわが養蠶業の根本的禍根が潜んでゐる。それ故に生絲輸出市場の分散性を研究することは、今後の生絲對策として最も重要な問題となる。然るに米棉輸出總額における對日輸出の地位は、二〇%餘を占め生絲に比して甚だ低い。即ち米棉市場としての吾國は、可なり重要な地位を占めてはゐるが、併し生絲市場としてのアメリカの地位には比較すべくもない。この點において生絲と米棉との交換貿易は、アメリカよりも寧ろ吾國にとつてより、重要な問題である。

然らばこの交換貿易は、如何なる數量的基準によつて成立しうるか、吾國としてはなるべく多量の生絲輸出を、アメリカとしてはなるべく多量の棉花輸出を保證せしめんと希望することは言ふまでもない。かゝる場合に一應の客觀的基準となりうるものは、過去の數字より外にない。いま過去五ヶ年の貿易數量を示せば第十一表の如くである。

第十一表 生絲および棉花の輸出數量

	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	平均
生絲對米輸出 <sup>1)</sup>	五八〇 千俵	四三三	五〇〇	五二三	四三七	五〇一
棉花對日輸出 <sup>2)</sup>	一、三〇九 千俵	一、〇一〇	一、一八八	二、二九三	一、七四三	一、五二三

今かりにこの數字を基準とすれば、生絲五十萬俵の輸出に對して、米棉およそ百五十萬俵の輸入となる。この數量が少くとも有力なる客觀的基準となるべきこと言ふまでもない。併しながら交換貿易といふも、文字通りの物を交換ではない。依然として貨幣價值による賣買貿易に過ぎないのであるから、そこで右の如き基準數量は、之を價額として如何なる關係にあるかを考慮せねばならぬ。之を顧みざる時は、かの日印協定におけるが如く價額上極めて不均衡なる交換貿易を協定して、結局において貿易調整の目的を達し得ないからである。いま右の貿易數量を價額として示す時は第十二表を得る。

第十二表 生絲および棉花の貿易價額<sup>4)</sup>

	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	平均
生絲輸出價額 <sup>5)</sup>	七〇三 百万円	五九六	三三三	三六〇	三五五	四三二
米棉輸入價額 <sup>5)</sup>	二七六	一七六	一五三	三三〇	三八一	二六二

之によれば價額上では兩者の間に可なりの不均衡があり、吾國にとり有利である。けれども之は生絲も米棉も過去五ヶ年の價格を前提とするものであり、現實には生絲の値下り傾向と米棉の値上り傾向が認められるから、假りに右の數量を採るとしても、これ程の不均衡とはならないで

1) 生絲年鑑、昭和九年 P. 194  
 2) アメリカ國勢局調査(内外綿業年鑑、昭和九年版、P. 40)  
 3) 拙著、貿易統制論、P. 123  
 4) 大藏省、外國貿易月表に據る。  
 5) 嚴密にはアメリカ輸出價額に據るべきであるが、便宜上吾國の輸入價額に據つた。

あらう。たとひ多少の不均衡は存するとしても、他の諸商品において吾國の入超を示すとせば、全體としては均衡状態に近づきうるであらう。それ故に前示の數量的基準は、固より一つの試案ではあるが、甚だしく不合理な數字とも思はれない。かりに之によるとせば、吾國は米棉百五十萬俵に對して、生絲五十萬俵を輸出しうべく、之を基準として米棉輸入の増減に對應して、生絲輸出を増減しうるることとなるから、現實に何程の輸出となるかは固より不明である。たゞ一應の基準は之によつて明示せられ、そこに吾が生絲對策の目標を認めて、之が生産および配給を統制することが出来るであらう。前にも指摘する如く、生絲輸出の減退は、數量よりも寧ろ價格の低下に負ふ所であるから、單に一定數量の輸出を確保した所で、貿易調整上の效果は薄い。その數量を基礎とする生産・配給の統制によつて、或る程度の價格統制を實現することが必要である。

## 五、對米輸出の促進

生絲と米棉との交換貿易を別にして、他の方法による日米貿易の調整は可能か否か、この問題に入るに先だち、日米市場の相互重要な程度につき、事實の検討をしておかう。即ち輸出市場および輸入市場として、アメリカは吾國にとり如何なる地位を有するか、また吾國はアメリカにとり如何なる地位を有するかの問題これである。これは貿易上の相互依存の程度を知り、從つて兩者相對の態度を知る上に、重要な基礎的事實である。いま最近五ヶ年の貿易につきこの關係を計

算して第十三表に示す。

第十三表 日米市場の相互重要度

	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	以上平均	一九二〇年 一九二四年平均
一、 總輸出額に對する對米輸出の比率	四三・五%	三四・四	七〇	三一・五	二六・四	三三・四	三二・五
總輸入額に對する對米輸入の比率	二九・五	二六・六	二七・七	三五・六	三三・三	三〇・七	二六・二
二、 總輸出額に對する對日輸出の比率	四九	四四	六四	八四	八六	六五	三二
總輸入額に對する對日輸入の比率	九・八	九・一	九・八	一〇・一	八・九	九・五	五・〇

之について先づ最近の五ヶ年平均における吾國にとつてのアメリカ市場の重要度を見るに、輸出市場としては、總輸出額の三四・四%を占め、輸入市場としては三〇・七%を占める。即ちアメリカ市場は吾が貿易のおよそ三分の一を占めて、吾國にとり極めて重要な相手國である。然るにアメリカにとつての吾國の重要度は、輸出において平均六・五%、輸入において九・五%を占むるに過ぎず、吾國の地位は前の場合に比して甚だしく微弱である。

併しながら之をその發展傾向について見る時は、輸出市場としてのアメリカの地位は、最近に至つて著しく減退の傾向にある。即ち五年前の四二・五%から最近の二六・四%にまで低下してゐる。之に反して輸入市場としてのアメリカの地位は、却つて二八・四%から三二・三%に遞増の傾向を示してゐる。次にアメリカの輸出市場としての吾國の地位も著しく向上して、四・九%から八・六%にまで上つてゐるに反し、輸入市場としての吾國の地位は、著しく變化を示してゐない。而し

て現實の問題としては、輸入市場よりも輸出市場をより重要と考へねばならぬから、相互の輸出市場として見る時は、吾國にとつてのアメリカの地位は低下しつゝあるに反し、アメリカにとつての吾國の地位は向上しつゝある。對米輸出の促進によつて片貿易を調整せんとするのは、即ちこの缺狀傾向を矯正せんとするものに外ならぬ。

さて絹棉交換または生絲輸出の増進による調整が不可能なるか、または效果の十分ならざる場合には、他の方法による調整を考へねばならぬ。そのためには第一に、他の諸商品の對米輸出の増進による積極的方法か、第二に棉花その他の對米輸入品の抑制または轉換による消極的方法か、何れかの途によらねばならぬ。

第一に後者の消極的方法のうち、棉花の輸入については、輸入先の轉換を計るより外に途はない。最近問題となりつゝあるブラジル棉花の輸入は、この點において重要な意義を有する。また將來の問題としては、支那棉花・滿洲棉花・フィリッピン棉花等々が、同じ意義を有するであらう。次に棉花以外の輸入品としては、さきの第八表に示さるゝが如く、鐵・機械・自動車等の重工業品と、木材・パルプ・皮革・銅・鑛油等の原料品を主とする。後者の原料品は輸入抑制の困難または不利なるものであるから、姑らく別とし、前者の重工業品については、最近のわが重工業の發展と共に減退の傾向に向ふべく、ことに機械工業・自動車工業の如きは、今後の發展によつて輸入品を壓倒しうる時代が來るであらう。片貿易を調整するために、原料品輸入を抑制するが如き



は採るべきでないが、併し國內生産の發展する結果として、重工業品輸入の減退するが如きは、經濟發展の常道と言はねばならぬ。

第二に生絲以外の輸出品のうち、今後の増進を期待しうるものは何か、之を見るためには、まづ最近に對米輸出の増進しつゝある商品は何かを確かめ、その各々の商品について、アメリカ國內の生産關係または他の諸國からの輸入關係を検討せねばならぬ。いま最近五ヶ年における對米輸出増進の著しい主なる商品を拾ひあげて第十四表を掲げる。

第十四表 對米輸出の増進せる商品

	綿織物	メリヤス製品	陶磁器	硝子及同製品	製帽用眞田	ブラツシュ	鋸具
昭和五年	六三	五七	一〇、八〇〇	一三六	八七四	一、三三八	三、四六九
昭和六年	六三	四五〇	六、六三四	一〇〇	六三三	一、二三	二、九三
昭和七年	二六二	五二〇	六、四四一	四九一	六三三	一、二五六	四、九八六
昭和八年	一、二三八	八九	一〇、一八〇	八〇二	三、三〇三	一、六七九	六、九七五
昭和九年	二、六二	一、五四	一四、三三	一、八二五	四、九四六	一、八〇七	九、六〇三

之について見るに、是等の諸商品は最近に急速な輸出増進をなしつゝあることが判る。尙ほその他にも貿易月表に特記されざる零碎商品にして、急速に進出しつゝある商品もある筈であるが、こゝにはその資料がない。

而して右の諸商品のうち綿織物については、既述の如く國內生産者の反對運動を見るに至つたが、併しそれは國內生産額の一%にも足らぬものであり、且つ他の諸國より年々アメリカに向つ

て輸入せらるゝ織製品は、三千萬弗（一億圓）以上にも達しつゝあるから、吾國からの綿布輸出を十倍化したところで、その三分の一にも達しない。それ故に何等かの國內對策によつてアメリカ綿業の窮狀さへ緩和されうるならば、綿布輸出はそれ程の問題を惹きおこすことなくして、尙ほ著しく増進されうる筈である。

その他の諸商品については、アメリカ國內の生産事情および諸外國からの輸入事情を詳にする資料を有しないが、これらの商品種類より見て、恐らくアメリカの國內産業を壓迫することなくして、輸出を増進せしめうるものと考えられる。この種の雜貨商品は、尙ほ右の外にも多數に輸出せらるゝ筈であるが、これらは比較的に人の注意をひくこと少く、且つ吾國の特殊産業によつて生産せらるゝものが多いから、輸出先の反對運動を刺激すること比較的に少くして、輸出を増進せしめうべく、また吾が輸出貿易を商品的に分散せしむるの效果あるものである。

要するに對米貿易が巨額の入超傾向にあることは、貿易調整の對策上からは、吾國の最も強味とする所である。この強味を遺憾なく善用して、吾國より進んで積極的に調整策を講すべきであり、そのためには對米輸入を抑制するが如き消極的方法よりも、寧ろ對米輸出を促進することによつて均衡に近づかんとする積極的方法を採らねばならぬ。即ち日米貿易の調整は、二重の意味において積極的調整でなければならぬ。（一〇・五・二〇）